

「内務省委託本」調査レポート

第2号：高橋是清『随想録』

2012年6月(報告/安野一之)

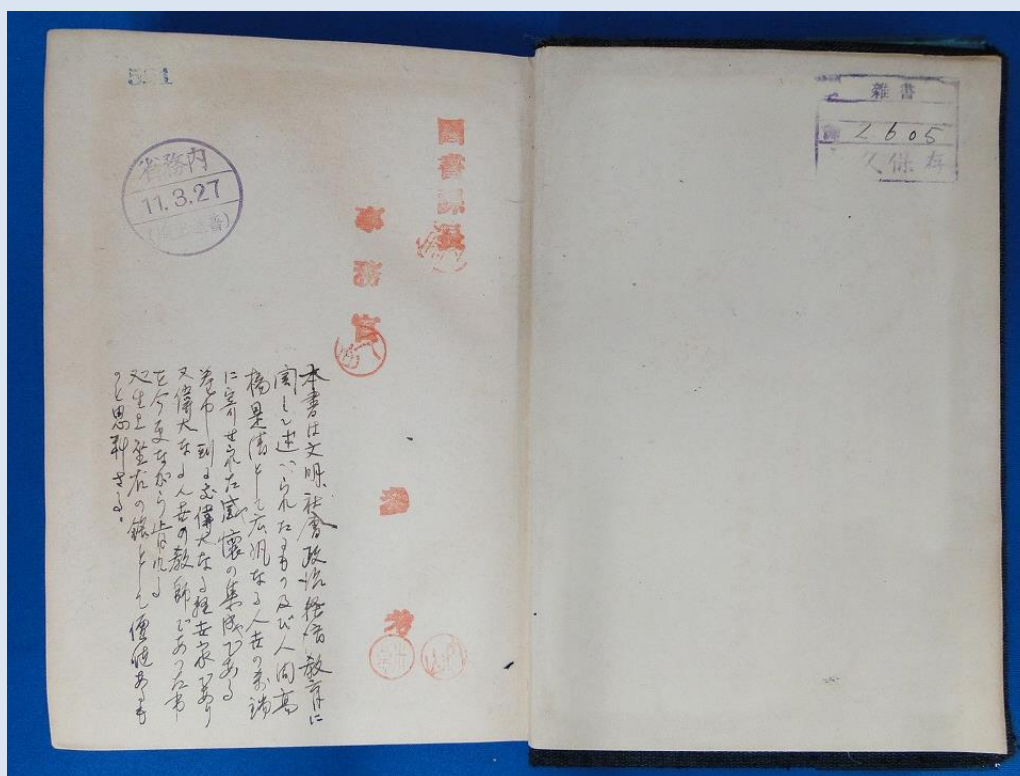
発行：千代田区立千代田図書館

戦前期の日本では、中央官庁の一つであった内務省が出版物の検閲を行っており、全国で出版されたさまざまな本が内務省に納本されていました。1937(昭和12)年頃以降、内務省で検閲業務に用いられた原本の一部が、千代田図書館の前身である駿河台図書館をはじめとする市立図書館4館に委託されることになりました。当館では、これらの資料を「内務省委託本」と呼び、現在約2,300冊が確認されています。

当館の所蔵する「内務省委託本」は、実際に検閲に使用されたもので、内務省の係官が内容をチェックするために引いた赤線・青線、出版の可否についてのコメントなどが残されています。発禁本は含まれていませんが、当時どのように検閲が行われていたのかを知ることができるという点で、出版史上貴重な資料です。当レポートでは、「内務省委託本」の調査研究により明らかとなった新事実について、様々な切り口からご報告いたします。

高橋是清の遺稿集『随想録』

高橋是清の『随想録』は、数多くある「内務省委託本」の中でもっとも有名な本だと言える。見返しに書き込まれたコメントは、その長さもさることながら、内容的に言っても、従前の検閲官のイメージを大きく覆すものであり、展示会の度に大きな反響を呼んできた。



『随想録』見返し

高橋是清著(千倉書房、昭和11年3月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

この本の奥付を見ると印刷日は3月26日、発行日は3月29日となっているが、4月1日の「読売新聞」の広告を見ると「愈々(いよいよ)全国一斉発売!!」となっており、実際の発売日は4月1日だったと推察される。

二・二六事件からひとつき余り。3月26日には高橋是清の本葬もあり、高橋是清を失った悲しみがピークに達していたこのタイミングで出された『随想録』はベストセラーになることを約束された本であった。

最終的に何部売れたのか、残念ながら現在の千倉書房にも資料が残っていないようだが、発売からひとつきも経たない4月26日付の読売新聞広告には「本日九十五版出来!!」とあり、かなり早いペースで売れていたことが推察される。

珍しいタイプのコメント

コメント部分を書き出すと次のようになる。

本書は文明、社会、政治、経済、教育に關し述べられたるもの及び人間高橋是清として広汎なる人世の萬端に寄せられた感懐の集成である。巻中到る処偉大なる經世家であり又偉大なる人世の教師であつた事を今更ながら肯れる。処生上座右の銘として価値あるものと思料さる。

(句読点は引用者が適宜加えた)。

このコメントを書いた検閲官の名は米良貫一郎。詳細な経歴は不明だが、『警察講習所内務省学友会員名簿 昭和十三年六月』(アジア歴史資料センター;レファレンスコード:A05020214200)によると出身は大阪府、卒業年次は十三回生となっており、昭和2年頃の卒業と思われる。警察講習所は今日の警察大学校につながる組織で、警部・警部補を養成するために大正7年に作られた。入学資格には「二年以上の実務経験」とあることから、検閲官になる以前の米良氏は警察官だったと推察される。

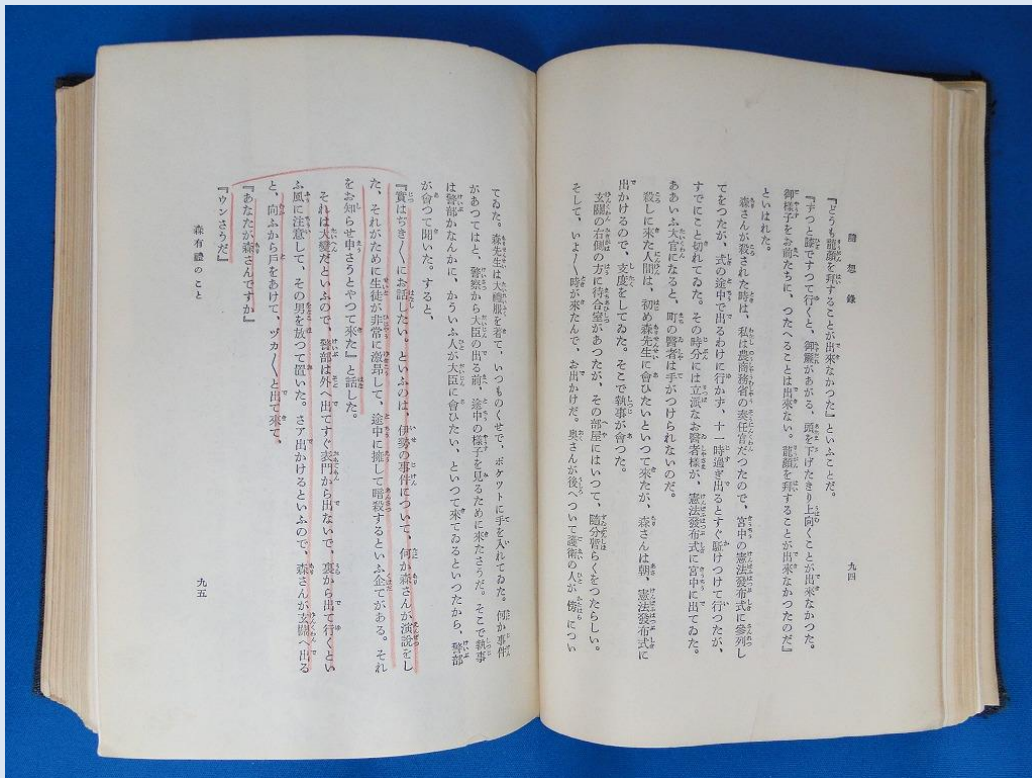
内務省による単行本検閲は、本そのものが決裁書類を兼ねており、見返しに書き込まれたコメントや押印は重要な意味を持っていた。また、当時の検閲官は一人あたり一日に4~5冊の単行本に加え、雑誌や官公庁刊行物も検閲しており、多忙を極めていた。従ってコメントが書き込まれることは、そもそも少なかったと考えられる。

「内務省委託本」は検閲をパスした本なので、コメントがあったとしても簡単なものが多い(例えば「内容ニ支障ナシ」や「不問」など)。一方、国立国会図書館に所蔵されている発売頒布禁止処分を受けた本の見返しには、禁止箇所やその理由などが書き込まれているが、あくまでも事務的な伝達事項であり、『随想録』のコメントのように検閲官の肉声が伝わってくるようなものは非常に珍しい。特に「処生上座右の銘として価値あるものと思料さる」などといった部分は、処分を受けた本ではあり得ないコメントであり、「内務省委託本」ならではとすることが出来るだろう。

米良検閲官と『随想録』

では、米良検閲官は具体的に『随想録』をどのように検閲したのか、残された傍線を手がかりに考察してみたい。

『随想録』に残された傍線、パーレン(カッコ)などは 20 箇所を超える。ここでは主立ったものを紹介すると共に、現在入手できる『随想録』(中央公論社(中公クラシックス J42)、2010 年 11 月)の該当箇所を提示したい。



『随想録』 pp94-95

高橋是清著(千倉書房、昭和 11 年 3 月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

これは「森有礼のこと」の一節(中公クラシックス;P80L15~P81L12)で、明治 22 年 2 月 12 日に森有礼が暗殺された時の様子を書いた部分。傍線とパーレンが付されている。

半世紀近く前の事件が安寧を脅かすとは思えないが、暗殺がまだ生々しい現実だった当時としては無視することの出来ない部分だったのかも知れない。

『実はちぎちぎにお話したい。といふのは、伊勢の事件について、何か森さんが演説をした、それがために生徒が非常に激昂して、途中に擁して暗殺するという企てがある。それをお知らせ申さうとやってきた』と話した。

それは大変だといふので、警部は外へ出てすぐ表門から出ないで、裏から出て行くといふ風に注意して、その男を放つて置いた。さア出かけるといふので、森さんが玄関へ出ると、向こふから戸をあけて、ツカツカと出て来て、

『あなたが森さんですか』

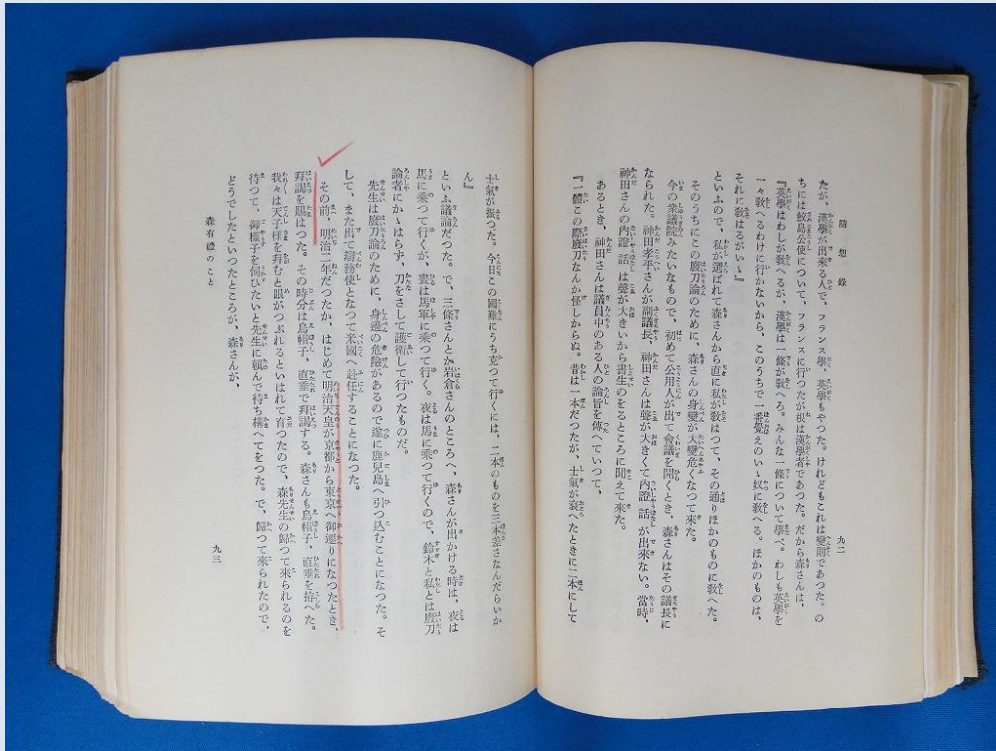
『ウンさうだ』

といふと、そのまま抱えて小倉の袴のところに隠した出刃包丁で殺つた。ゑぐらうとしたところを、お附きの剣道の達人な男が首を落としてしまった。

森先生はすぐに傍の左の方の西洋便所の中にはいつて、錠をおろしてしまった。

大学のお医者なんかも来る。

私が行つた時には、人工呼吸をやつてゐたが、どうしてもダメだつた。



『随想録』 pp93-94

高橋是清著(千倉書房、昭和11年3月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

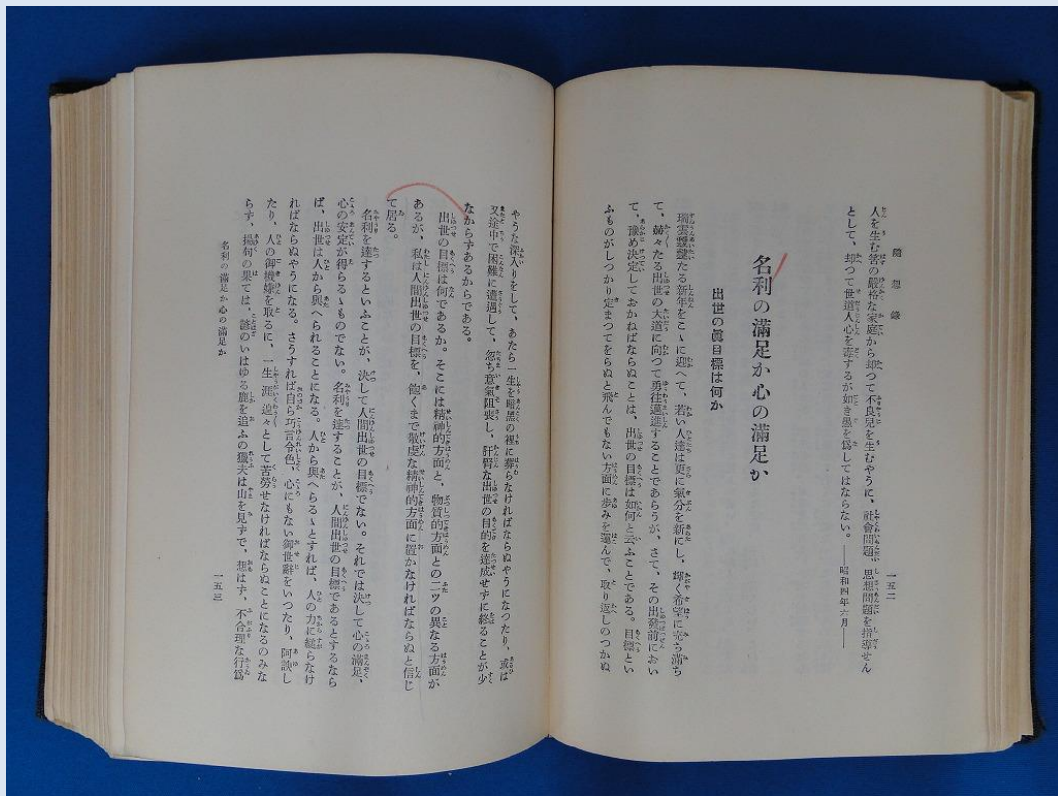
順番は前後するが、これは上述の傍線部の直前にある傍線とチェック(中公クラシックス;P79L11)。

明治天皇が京都から東京へ御遷りになつたとき、拜謁を賜つた。

天皇・皇室に関する記述は常に細心の注意を払われていた。これは通常の検閲業務の一環だと言える。

周知のように、検閲は「安寧」と「風俗」に分けられていたが、その「安寧」の検閲基準である「一般的標準」の第一条は「皇室の尊厳を冒瀆する事項」であつた。他の「内務省委託本」を見ても皇室関係の記述には神経を配っていたことが良く分かる。

余談だが、表紙に花柄をあしらったデザインの本が、花の形が「菊の御紋」に似ているというだけで注意を受けた事例もある。



『随想録』 pp152-153

高橋是清著(千倉書房、昭和11年3月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

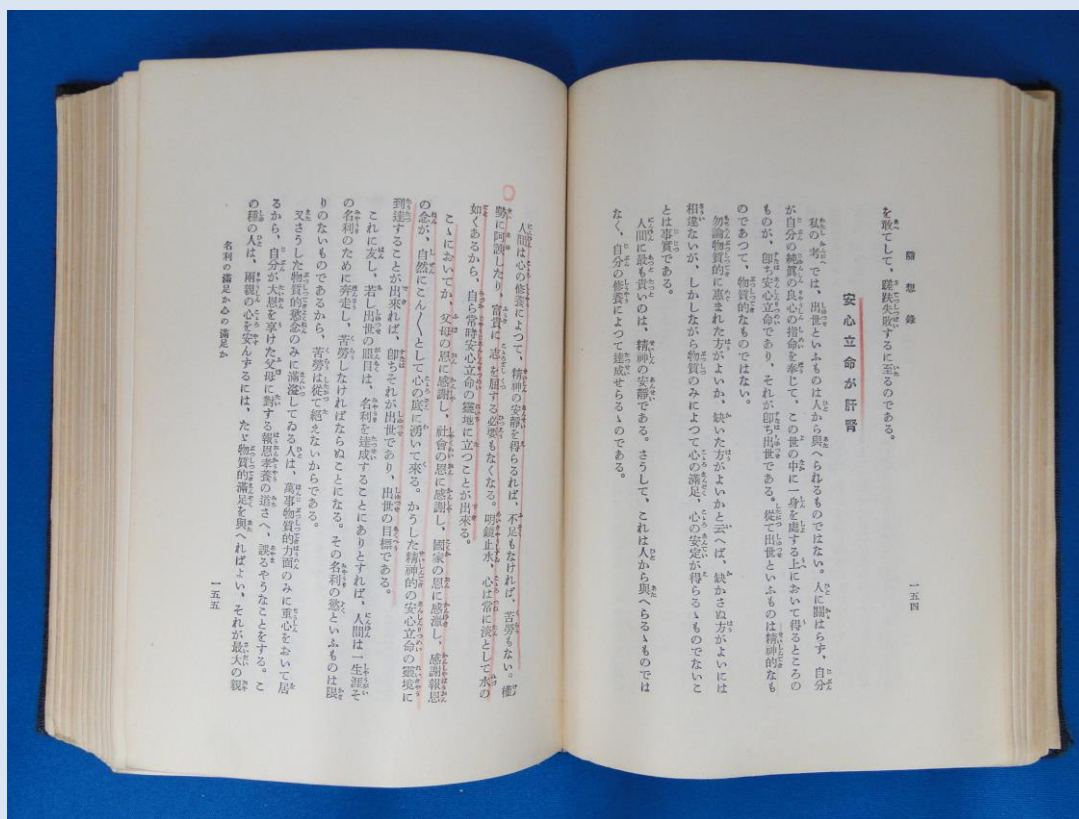
次は「名利の満足か心の満足か」(中公クラシックス;P123L7~L8)の一節。昭和5年の1月に書かれたこの章は「出世」について高橋是清の哲学が存分に語られている。写真では分かりにくいですが、この部分にはパーレンと薄く鉛筆の傍線(下線部)が付されている。

出世の目標は何であるか。そこには精神的方面と、物質的方面との二つの異なる方面があるが、私は人間出世の目標を、飽くまで敬虔な精神的方面に置かなければならぬと信じて居る。

検閲官は通常、赤鉛筆を用いてチェックを入れていく。検閲官が二人の場合、二人目は青鉛筆を使うのが通例であるが、稀にブルーブラックの万年筆が用いられることもある。

この箇所のような鉛筆による書き込みは、ほとんどの場合、閲覧者の落書きなのだが、『随想録』に関しては他に鉛筆で書き込まれた箇所はなく、少々不自然である。もしかすると、上司である事務官か課長が『随想録』を読みながら、手元の鉛筆で思わず引いてしまった線かも知れない、などと想像が膨らむのである。

米良氏はこの次の節「安心立命が肝要」(中公クラシックス;P124L13~P125L5)に強く惹かれたようで、傍線と赤マルを付している。



『随想録』 pp154-155

高橋是清著(千倉書房、昭和11年3月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

人間は心の修養によつて、精神の安静を得らるれば、不足もなければ、苦勞もない。権勢に阿諛したり、富貴に志を屈する必要もなくなる。明鏡止水、心は常に淡として水のごとくあるから、自ら常時安心立命の靈地に立つことが出来る。

ここにおいてか、父母の恩に感謝し、社会の恩に感謝し、国家の恩に感謝し、感謝報恩の念が、自然にこんこんとして心の底に湧いて来る。かうした精神的の安心立命の靈境に到達することが出来れば、即ちそれが出世であり、出世の目標である。

先の節と合わせて高橋是清の出世観が語られている部分。書いてあること自体は月並みなのだが、高橋是清が語ると説得力がある。特に「権勢に阿諛したり」という部分は、二・二六事件直後だと一層胸に響くところがあったのだろう。

まとめ

これまで見てきたように、『随想録』に残された検閲の痕跡は、一人の人間としての検閲官の姿を我々に垣間見せてくれた。これまで実際の検閲業務を担った内務省属官が、具体的にどのように検閲したのかを伝える資料はほとんどなく、その意味で、『随想録』に残されたコメントや傍線は貴重な「証言」だと言える。

だが、残念なことに、このような「証言」はそれほど多くはない。現在確認されている千代田図書館所蔵「内務省委託本」約 2360 冊中、コメントが記されている本は 239 冊、傍線が書き込まれている本は 146 冊にとどまる。前述の通り、コメントの多くは素っ気ないものだが、傍線部と併せて読み解くことで、検閲官が具体的にどのような部分に関心を持ち、どのように検閲したのかを知る手がかりになるだろう。

「内務省委託本」は検閲をパスした本であり、その多くは今日も古本屋で入手することができる。当時、『随想録』を手にした読者も、まさかこのような検閲が行われていたとは想像もなかったことだろう。これまで検閲というと発売頒布禁止処分などを受けた本を中心に論じられてきたが、処分を受けなかった本もまた、検閲を受けていたことを忘れてはならない。

そして両者を対照させることで、これまで見えてこなかった検閲の実態、どこまでが許されて、どこからが許されなかったのか、を知ることができるのである。

---Written by-----

安野一之 1970 年生

國學院大學大学院博士後期課程単位取得満期退学

国文学研究資料館 COE 研究員

国際日本文化研究センター技術補佐員など

2007 年から内務省委託本の調査・研究に取り組んでいる。

近著(共著)に『明治期「新式貸本屋」目録の研究』(作品社; 2010.11) など。

千代田図書館蔵「内務省委託本」のご利用について

- 「内務省委託本」は閉架書庫に保管しており、事前に申請いただければ、どなたでも閲覧・撮影いただけます。
- 検索には、千代田図書館ホームページから「内務省委託本検索システム」、もしくは『千代田図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』掲載の目録をご利用ください。(OPAC、Web-OPAC には対応していません)
- 詳しくは図書館職員までお問い合わせください。

発行: 千代田図書館「内務省委託本」研究会 ※本資料内容の無断転載はご遠慮ください。

お問い合わせ: 千代田図書館・企画「内務省委託本」担当 電話 03-5211-4290